

自動車リサイクルにおける地域課題とは。

大宮透さん（以下、大宮） 環境や防災分野、行政DX（デジタル技術を活用した行政サービスの改革）を推進する部署にいます。自動車のリサイクルについては正直知見がなかったのですが、今日はいろいろ教えていただければと思っています。

鶴田雅裕さん（以下、鶴田） まず大前提になりますが、廃車はゴミではなく資源の塊（かたまり）なのです。日本では自動車リサイクルに関わる人々の努力と工夫により車両重量ベースで99パーセント、使用済み自動車のほとんどがリサイクルされています。国際的には「ジャパンモデル」と言われ、日本の高度なりサイクル技術や仕組みを学ぼうと、海外からも視察に来るほどです。

大宮 日本の自動車リサイクルは、海外に誇（か）っているもののですね。その上で課題はあるのでしょうか。また、小布施町のような1万人規模の行政として、自動車リサイクルに、どう関わるとういでしょうか。

鶴田 課題として「不法投棄への対応」と「被災自動車の処理」があります。不法投棄でいえば、たとえば離島。島に廃車のリサイクル工場がない場合、リサイクル工場がある地域まで船で運ばなければならないの

の経済活性化にも貢献できるとしたら、行政としても積極的に関わらねばと感じました。

鶴田 次に「被災自動車の処理」について。車の所有者は使用を終えた車を、販売店などの引取業者に引き渡す役割を担っています。ただ、大規模な自然災害により車の所有者が分からない状況、たとえば津波や土砂災害によって、ナンバープレートが外れ、車台番号もわからないような被災自動車の取り扱いについては、JAIRCから自治体に情報提供を行っています。

自治体と考える、自動車リサイクルのこれから。世界に誇る「ジャパンモデル」のリサイクル制度。

長野県小布施町役場総務課課長兼総合政策推進室室長の大宮透さんが、自治体として考えるべき自動車リサイクルのあり方について、『自動車リサイクル促進センター』（以下JAIRC）再資源化支援部の課長・鶴田雅裕さんに話を聞きました。
photographs & text by Yuki Inui

ですが、輸送コストを敬遠され、不適正な保管や不法投棄が懸念されます。ただ、実際は廃車の海上輸送費には補助が出ます。このような情報の周知など、離島地域の自治体との連携に改善の余地があります。そのほか、地道な活動にはなりませんが、離島において適正なりサイクル処理が行えるようになれば、島のリサイクル関連事業の経営が成り立つことにもつながります。自動車リサイクルを広い意味でとらえ、島の活性化にもつながればと期待しています。大宮 小布施町では景観まちづくりを進めていることもあり、不法投棄ではないかもしれませんが、農地などに放置されている車を見かけると結構気になりますね。離島と同様に使われなくなった車は課題だと感じますし、自動車リサイクルを進めることで、地域の中の解体事業者などの利益につながることで、結果、町

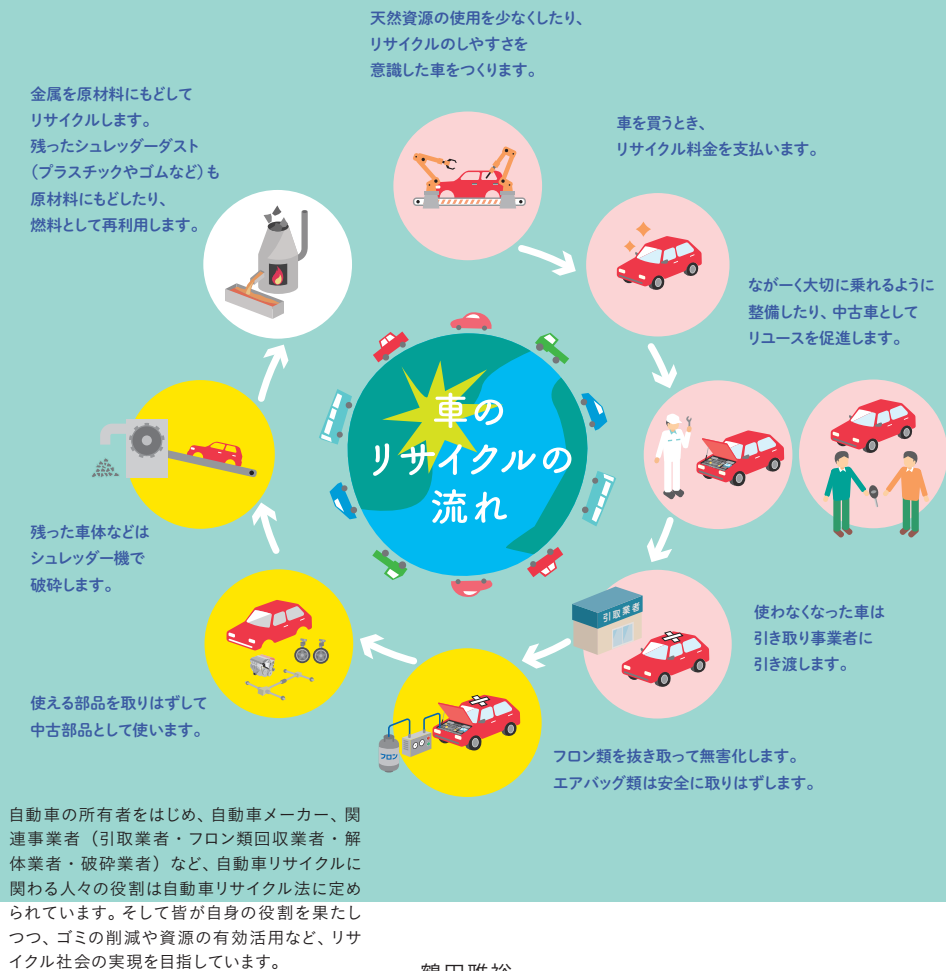
大宮 津波だけでなく、近年は異常気象などによる河川の氾濫や土砂災害が頻発しています。小布施町も2019年の台風19号災害で、町が処理する被災自動車は出なかったものの、住宅の浸水などにより甚大な被害がありました。ちょうど今、災害廃棄物処理計画を策定しているところ

鶴田 現在、特に南海トラフ地震の津波浸水予測が出されている自治体が策定する災害廃棄物処理計画に、被災自動車への対応を定めていただいているところです。JAIRCでは、大規模な災害が発生した場合に備え、自治体の好事例となる取り組みを共有するなどのお手伝いをしています。大宮 具体的にはどのような対応を自治体はとるべきなのでしょう。か。鶴田 被災自動車の手続きには時間がかかりますので、ほかの災害廃棄物と分けて、災害廃棄物の処理置き場を設ける対応が考えられます。

大宮 興味深いお話です。被災自動車とその他の災害廃棄物を分けておくことによるメリットは、どのようなのでしょうか。

鶴田 被災自動車を適正にリサイクル処理し、鉄・銅・アルミなどの資源に戻すことができれば、自治体の財政的な負担を少なくすることができる可能性もあります。

大宮 使用を終えた車でもゴミでは



自動車の所有者をはじめ、自動車メーカー、関連事業者（引取業者・フロン類回収業者・解体業者・破砕業者）など、自動車リサイクルに関わる人々の役割は自動車リサイクル法に定められています。そして皆が自身の役割を果たしつつ、ゴミの削減や資源の有効活用など、リサイクル社会の実現を目指しています。

『自動車リサイクル促進センター』

環境に配慮した快適なクルマ社会を目指し、自動車リサイクルの環境整備を推進する公益財団。



自動車リサイクル制度において役割を担われるステークホルダーをつなぐ活動は、地域の活性化にもつながります。

なく資源。自治体はこの認識を持たないといけませんね。

進化する自動車リサイクルと、地域の事業者のこと。

大宮 修理やタイヤの交換などでお世話になる地域の“車屋さん”は身近な存在。そして彼らの向こう側に、資源を生かす多様な生態系があることも、今回のお話でわかりました。

鶴田 実は稼働している事業者数は年々減少傾向にあります。背景には少子化や事業の統廃合などさまざまな要因があります。持続可能な仕組みとしていくためには、稼働している事業者が一定程度必要になるとの意見もあります。ただ、車を適正にリサイクル処理する際、都道府県をまたいで、さまざまな事業者が関わっているのが実態です。リサイクル処理をする上で事業者の得意分野やコスト面などを勘案しながら、ビジネスにしているのです。局地で被災自動車が発生した場合、その地域で適性なりサイクル処理ができなくなる可能性があるので、広域での自治体間や事業者間の連携はますます重要になります。

大宮 おもしろいですね。廃棄物ですと、基本的には越県してはいけないかったり、地域の中で処理をしていく大前提があります。でも、車の場合は資源であるから、ある種の競争

大宮 透

おおみや・とおる ●1981年山形県生まれ。小布施町総務課課長兼総合政策推進室室長。東京大学工学部都市工学科卒業、同大学院工学系研究科修了。2017年の第10回「小布施若者会議」の立ち上げに参画したことを機に、2018年に小布施町に移住。その後、小布施町役場の地方創生主任研究員として地方創生関連の政策を担当。現職に至る。

鶴田雅裕

つるた・まさひろ ●『自動車リサイクルセンター』再資源化支援部課長。担当業務は、離島対策支援事業（海上輸送費支援）、不法投棄対策支援事業（自治体による行政代執行への支援）、自動車リサイクルに関する自治体担当者向けの研修、自治体による被災自動車処理に関する情報提供など。

災害発生時における仮置き場の問題、勉強になりました。